

新渡戸稲造の社会教育

—雑誌『実業之日本』の修養言説を手がかりとして—

森 上 優 子*

はじめに

新渡戸稲造(1862(文久2)–1933(昭和8))は、近代日本を代表する国際人のひとりとして広く知られる人物である。彼の国際人としての活動のひとつに、*Bushido, The Soul of Japan* (和訳名『武士道』、1900)に代表される日本文化論の発信がある。彼はその『武士道』において、日本人の道徳観念に注目し、日本ではそれを武士道精神が担っていたと指摘した。

このような道徳への高い関心は、新渡戸の生涯を貫くものであった。彼の教育思想もその例外ではない。新渡戸は若き日本人に向けて、どのような道徳観念を養成しようとし、教育活動を行ったのだろうか。

新渡戸の教育思想に関する従来の研究は、主に第一高等学校を中心とする学校教育活動をその考察の対象としてきた。しかしながら、彼の教育活動を考察する場合、学校教育のみを対象とするのでは充分ではない。それとともに、新渡戸が行った多くの雑誌への寄稿などを通じた社会教育にも目を向ける必要があると考えられる。従来の研究では、この社会教育活動の側面が軽視されてきた傾向にあるといえる。そこで、本稿では、新渡戸の教育思想の全体像に迫る予備的考察として、いままで看過されてきた新渡戸の社会教育活動のなかでも重要な位置を占める、雑誌メディアを通じた修養言説を考察の対象とする。なかでも、彼の

修養言説が長期的にわたって掲載された点で極めて重要な出版物と考えられる雑誌『実業之日本』を取り上げる。⁽¹⁾

さて、『実業之日本』は、新渡戸の社会教育を考える場合、重要な雑誌であるが、その先行研究は極めて少ないのが現状である。その代表的な研究としては、馬静氏の労作である『実業之日本社の研究—近代日本雑誌史への序章』や、戸村理氏の論文などを挙げることができる。⁽²⁾

これらの先行研究をみると、新渡戸の修養言説に注目し、それを彼の思想の支柱をなすと考えられるクエーカー(Quakers)を通じたキリスト教信仰の観点から考察することに欠けている。本稿は、このような蓄積された研究史の空白部分を埋めるため、新渡戸のクエーカーを通じたキリスト教信仰の観点から彼の修養言説の思想的特徴の一端をあきらかにするとともに、彼の言説の思想的意義を検討したいと思う。

1. 『実業之日本』における新渡戸の位置

『実業之日本』は、光岡威一郎(1869(明治2)–1900(明治33))が創立した大日本実業学会(1900年より実業之日本社と改名)より1897(明治30)年に創刊された経済雑誌である。同時期の経済雑誌には『東洋経済新報』(1895年創刊)などがある。なかでも、『実業之日本』は実業で成功するための「人生案内的な読物」という性格を有した。⁽³⁾ その発行部数を見ると、「一九〇〇年頃で三千部前後」⁽⁴⁾ であるとか、「数年ならずし

* 文部科学省

て」「二万という日本一の雑誌にまでのし上がった」などといわれる。⁵⁾

このような性格を有する『実業之日本』の修養言説を支えた人物のひとりが新渡戸であったのだが、新渡戸の他にも実業之日本社の社長であった増田義一（1869（明治2）-1949（昭和24））がいる。増田は当時、新渡戸と同様に積極的に社会教育活動を行った人物として広く知られていた。

増田は『実業之日本』に毎号寄稿する他にも、『青年と修養』（1912）や『立身の基礎』（1923）、『運命の打開』（1930）などの修養書をつぎつぎと刊行するなど、修養に高い関心を寄せていた。⁶⁾ この増田が1909年に、当時、第一高等学校長であり、東京帝国大学教授であった新渡戸を実業之日本社の編集顧問として招聘したことは、『実業之日本』の修養言説を強化することに一石を投じることとなったと考えられる。増田が記した「新渡戸博士の思い出」から、その経緯を知ることができる。⁷⁾ 新渡戸は「社の主義方針等を聞き、僕が平素懐抱して居た主義と相一致する」（「余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか」『実業之日本』12巻1号（1909年1月1日））として、編集顧問を承諾した。

ここで、『実業之日本』の方針を確認しておきたい。増田は、『実業之日本』（12巻1号（1909年1月1日））に「我社の編集顧問として新渡戸博士を迎ふるの辞」を寄せるが、そこで『実業之日本』の目的を「新人格を建造」することにあったと述べている。

十年の歳月を一貫せる吾人の主義精神は、要するに我実業国民が、世界の舞台に立ち、新時代の主人となるに最も必要なる新人格を建造するに在りたりき。而して吾人は之を以て我社の天職なりと確信し、吾人の一切を挙げて此天職の爲に奮闘努力するを辞せざりき。

「我社の編集顧問として
新渡戸博士を迎ふるの辞」

ここに「十年の歳月」とあるが、この記事が掲載された1年半ほど前の『実業之日本』10巻12号（1907年6月1日）は十周年記念号と題されている。そこでは、「『実業之日本』は十年間に何を為したるか」という特集が組まれ、『実業之日本』の目的のひとつとして「健全なる成功」を挙げている。そして、目的とした理由を「品性を基礎とする者ならざるべからざるを感ぜしめんが為」という。つまり、『実業之日本』が説く実業界での「健全なる成功」とは単なる経済的に成功することを意味するのではなく、「品性」を発揮して実業に励むということであった。

では、この場合の「品性」とは具体的に何を指すのだろうか。この特集のなかで、「健全なる成功」について、実業之日本社を例として取り上げ、「自己の利益を念はずして読者の利益を念ふこと是なり」と述べている。このことから、「品性」とは利他の精神を意味すると考えられるのである。

『実業之日本』における道徳性を重視する姿勢は、そのまま新渡戸の修養言説の主旨とも一致するものであった。新渡戸は、成功をつぎのように理解する。

今後の覚悟としてもっと重要な問題は所謂人格を養ふことである。智識ばかりで成功するは、最も高尚な意味に於ての成功でない、金儲けや位階に熱心するくらゐでは眞の成功は出来ぬ。

「大国民としての青年の覚悟」
（『実業之日本』15巻12号（1912年6月1日））

新渡戸も実業界での成功を「人格を養ふこと」、すなわち、道徳性の確保と捉えた。以上のように、『実業之日本』は人生の成功が経済的成功というものさしで計られるような近代日本の資本主義社会に対して、修養言説を通じて警鐘を鳴らしたのである。

この目的のもと、新渡戸は『実業之日本』に修

養言説を継続的に寄稿した。そのことは、新渡戸の言説が掲載された数を年度別に集計した下のグラフからあきらかである。

新渡戸が最初に『実業之日本』に寄稿したのは1901年である。それは「欧米農業の大勢」というタイトルの農業に関するものであり、農政学者の立場からの寄稿であった。そして、最初の修養言説は、1907年に寄稿された「修養上に於ける余の実験」というタイトルのものであり、記者による筆記であった。その後、新渡戸の言説が飛躍的に増加するのは1909年である。この年は、先に述べたように、新渡戸が実業之日本社の編集顧問に就任した年であった。この年以降、新渡戸は国際連盟事務次長としてジュネーブに赴任した時代を除き、1933年にカナダで客死するまで主に修養言説を継続的に世に送り出した。このグラフから読み取れる継続的に寄稿した事実は、新渡戸が『実業之日本』の「人生案内的な読物」という性格を支えてきたことの証左といえるだろう。



(『実業之日本』の目次より作成。出典：国立国会図書館デジタルコレクション)

2. 新渡戸の修養言説の特徴

(1) 言説の構造的特徴

ここでは、新渡戸が編集顧問であった時代(1909-1912)の言説を中心に取り上げる。この明治末期は、いわゆる「修養書ブーム」の時代⁽⁸⁾にあたり、多くの修養書が刊行された。その時代にあって、新渡戸は、キリスト者の視点から何を説こうとしたのだろうか。まず、新渡戸の修養言説の構造的特徴について考察していこう。

執筆者というものは、読者層に応じて文章の書き方を工夫するが、新渡戸の場合はどうであったのだろうか。『実業之日本』の読者層は、社会学者であるE. H. キンモンズによれば、「商店の店員や下級会社員」とされる。⁽⁹⁾ 当時、金銭や学力などの事情から学歴コースを外れた青年たちが実業界へと進んだ。このような非エリート層の心を掴んだ新渡戸の修養言説とは、「学問のない人に学問を与へ、煩悶して居る人に、慰安を与へたい」という目的を第一とした。「余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか」(『実業之日本』12巻1号(1909年1月1日)) こうした目的を持つ新渡戸の修養言説の構造的特徴は、以下のようによまとめることができるだろう。

- ① だれにでも理解しやすい平易な文章である。
- ② 東西の思想家のことは、および新渡戸自身の体験談を豊富に取り入れる。
- ③ 宗教的視点を持つ。

新渡戸の修養言説は、日常で起こる卑近な事例のなかに東西の古典を組み込む構造を典型とした。それは古典がもつ思想を具象化する試みであり、古典がエリート層によって占有されるのではなく、広く非エリート層に向けての受容を拡大させていくという効果が期待されたと考えられる。

このように、新渡戸は古典を重視した。彼が『実業之日本』を通じて修養言説を発信していた

時期は、第一高等学校長として学校教育に従事していた時期でもある。彼は第一高等学校でも古典を素材として倫理の授業を行っていた。⁽¹⁰⁾ 彼は、古典の働きを『読書と人生』(1936)のなかで「意志の鍛錬とか、思想を固めるとか、心の慰め」(『読書と人生』『全集』第11巻 417頁)と述べている。このように、古典とは彼自身の修養言説を思想的に補強するとともに、その正当性を裏付ける役割を果たすものであった。

では、新渡戸は、修養言説のなかで具体的にどのような思想家を取り上げているのだろうか。彼は、西洋の人物として、キリスト、ソクラテス、シェークスピア、ミルトン、カーライル、ゲーテ、リンカン、東洋の人物としては孔子、孟子、また、日本人では、佐藤一斎、二宮尊徳などを好んで取り上げている。なかでも、キリストと聖書の引用が散見されるのがひとつの特徴といえるだろう。この点は、新渡戸の修養言説が思想的にキリスト教に依拠するものであったことを裏付けるものといえる。

(2) 重視した徳目

新渡戸は、古典を引用することによってどのような徳目を説いたのか。

修養言説のなかでは、「親愛」「同情」「情」「親切」「礼節」「思ひ遣」「愛」「慈悲」「慈善」「克己」などのことばが散見される。たとえば、「同情は如何にして修養するか 如何なる人が同情を受くるか」(12巻8号(1909年4月10日))、「親切を尽すには如何なる注意が要るか」(12巻23号(1909年11月1日))、「旅は道連れ世は情」(14巻11号(1911年5月15日))というタイトルにもなっているように、人間と人間との間の精神的紐帯を構築する徳目が多い。この点は、新渡戸の修養言説の独自性を示すといえるだろう。

つぎに、これらの徳目を、新渡戸のキリスト教信仰の観点から、その意味するところを考察していこう。新渡戸は、これらの徳目を聖書における「柔和」と符合させる。彼は、「聖書に柔和な

る者は幸なり、彼等は此世を継ぐものなればなりとの教訓は、此地方の歴史を見て一層強く感ずる金言である」(「西印度に於て実見せし恐しき事実より得たる教訓」『実業之日本』15巻9号(1912年4月15日))というマタイによる福音書5章5節のことばを、言説のなかで何度も取り上げている。新渡戸は、他者を受け入れる「同情」を強調することを通じて、神のもとに生きることを説いた。彼のキリスト教信仰が反映している好例のひとつである。

このように、新渡戸が修養言説で説いた徳目のなかでは、特に、「同情」や「情」についての言及が目立った。新渡戸は「人は生れながら同情あるもの」と捉え、「同情」を「根本的道德」と位置付ける。そして、「同情」を「相手の苦楽を見て自分の苦楽の如くに感ずる情緒である」と定義した。(「同情は如何にして修養するか 如何なる人が同情を受くるか」『実業之日本』12巻8号(1909年4月10日))そして、新渡戸は「根本的道德」とする「同情」に他の徳目を収斂させていくのである。その一例をつぎに示そう。

- ・社会的に団結して生活するには同情心があつて相互に結び付けなければならぬ。お互に思ひ遣があればこそ調和も保たれ幸福に生活することが出来るのである。

「同情は如何にして修養するか
如何なる人が同情を受くるか」
(『実業之日本』12巻8号(1909年4月10日))

- ・人と人との関係を結びつけるものは法律以外の力がある。それは即ち同情である。慈悲とか愛とか、名は様々あるが、兎も角世人と我とを結びつけるに法律以外の力がある。

「旅は道連れ世は情」
(『実業之日本』14巻11号(1911年5月15日))

- ・人情が敦厚なれば、一もつと砕いて云へば親

切とか思遣りとか誠とかがあると、人世は美はしきもの、生ける甲斐あるものゝ様に思はれる。

「外は柔、内は剛」

(『実業之日本』14巻16号(1911年8月1日))

これらの言説をみてわかるように、新渡戸は「思ひ遣」「慈悲」「愛」「親切」を「同情」と同義とみていることがわかる。そして、新渡戸は「同情」を人間に生来的に備わっている「根本的道德」と理解していることから、人間と人間との間の精神的紐帯は人間の生来的な特性であるという認識を持っていたと考えられる。このように考えるならば、修養言説における新渡戸の主張とは、人間の生来的特性の発揮ということになるのである。

3. 理想社会の建設

(1) 「ソシアリチー」という理想

以上から、新渡戸が『実業之日本』において重視したことは、人間の精神的紐帯であったことがわかった。そこで想起されるのが、彼がよく用いたことばである「ソシアリチー」である。このことばは、修養言説のなかでも何度も登場する。その意味について、彼は「人間が共同生存せんとする性質」であり、「人類が発達して今日に至らしめた最高の性格である」と説いた。(「応対の第一秘訣は気取らざるにあり」『実業之日本』12巻24号(1909年11月15日))新渡戸は「ソシアリチー」こそ、人間の生存の継続性を担保するものと捉えていることがわかる。

ところで、この「ソシアリチー」については、新渡戸が第一高等学校長に就任したとき(1906年10月)に一高のあるべき理想像としても説かれている。日本を代表する倫理学者で当時、一高生であった和辻哲郎(1889(明治21)–1960(昭和35))はその著述のなかで、「ソシアリチー」を「大きい寛容な心をもって人と和して行くこと」であ

り、「社交性」と記している。⁽¹¹⁾新渡戸はこの理想を掲げて、当時の一高における「籠城主義」の改革に取り組むことを宣言した。⁽¹²⁾新渡戸は、「籠城主義」を排他的であり、高慢心を起こしたり、向上進歩が遅々たるなどといい、一高生が社会のなかで孤立することを憂えた。言い換えれば、新渡戸は、「籠城主義」が人間の生来的なあり方を脅かすものとして理解し、そのような生き方を危惧したのである。

『実業之日本』への寄稿は、新渡戸の一高での教育活動と時を同じくするものである。「ソシアリチー」の主張は、人間の生における孤独や孤立を排除する意図のもと、当時の新渡戸の教育思想に一貫する日本社会のあるべき理想だったといえるのである。

(2) 「徳治国」の建設

新渡戸の理想とする社会は、『実業之日本』のなかでしばしば「徳治国」や「礼治国」ということばで表現されている。彼は、「徳治国」を「法治国」と対比して説く。

新渡戸はなぜ「法治国」を理想としないのか。新渡戸は「法治国」を「権利と義務によって結びつく人間関係」(「手紙一本でも修養の基となる」『実業之日本』15巻13号(1912年6月15日))に基づくといい、「法律は人と人との関係を律するも、未だ以て之を円滑ならしむることは出来ぬ。法治国と称し非常に尊重するものもあるが、法治といふのは盗賊が入つたなら之を捕縛する、殺人者があれば之を糺すといふに止り、悪を罰し或は防ぐことは出来るが善を勧めることは法律の力に望まれぬ」(「親切を尽すには如何なる注意が要るか」『実業之日本』12巻23号(1909年11月1日))と述べ、「善」の発揮を推進できない点で、法による支配の限界を指摘するのである。

このような理解から、人間の「善」を重視する新渡戸の姿が浮かび上がる。彼は「法治国」における人間関係に対置するものとして、「徳治国」を位置付ける。それは、いうならば、新渡戸が人

間に内在すると信じる「善」を基盤とする「温き関係」からなる国であった。その関係性においてのみ、社会は「円満」に営まれるというのである。

世の中は論理通りに押して行かれるものでない。冷かなる権利義務以外にも、温き関係がある。之が完全に行はれて、世は円満となり、社会は幸福になると思ふ。

「手紙一本でも修養の基となる」
（『実業之日本』15巻13号（1912年6月15日））

新渡戸は、その社会を具体的に、「世の中は相持ちで持つて行くのであるから、助け助けられ、惜み惜まれ、苦も楽も皆相互に分ちながら行くものである」（「惜まるゝ人」『実業之日本』14巻6号（1911年3月15日））と示している。

「徳治」とは、徳のある君主が道徳によって政治を行うという儒家が唱えた政治理想であるが、先の言説でもわかるように、新渡戸の場合は、儒教的な政治秩序を説くというよりも、社会の構成員である人間が利他の精神を發揮し合い、相互に支え合うことによって構築された社会を意味するものであった。

4. 新渡戸の修養言説における宗教的視点

(1) クエーカー信仰

—「心を清ふする」ということ—

新渡戸は相互に支え合う社会の実現に向けて、修養言説で先に挙げた徳目の發揮を要請したと考えられる。彼が理解するように、徳が人間に生得的であるとするならば、新渡戸の教育とは、これらの徳目の發揮を促すことを意図するものであった。この点を考えるとき、新渡戸の宗教的視点が大きな意味を有するのである。彼が修養言説のなかでキリストや聖書を通じて宗教に関して言及したのは、そのことを物語る。

つぎの一節は、新渡戸の宗教的視点を端的に示

すものとして注目される。

人は人間と人間とのみならず、人間以上のものと関係あるヴァーチカル—垂直線的に関係のあることを自覚したのである。人生は横の空気を呼吸するのみでは生きるものでなく、縦の空気をも吸ふものであることを知つて貰ひたいのである。

「青年は如何に志を立つべきか」
（青年修養法其二）
（『実業之日本』12巻6号（1909年3月15日））

新渡戸の人間観である。新渡戸は人間存在を人間と人間との関係性と「人間以上のもの」との関係性との交点上に位置付けることを基本的な考え方とする。どちらか一方の関係性が欠けたとき、人間存在は危ぶまれる。新渡戸は、上の一節に続く部分で、「人間以上のもの」の具体例として、「耶蘇教の神」「仏教の世尊」「阿弥陀」「神道の八百万の神」を挙げる。ここでわかるように、彼は特定の宗教を排除するようなことはしない。むしろ超越なるものの個別性を払拭し、人間の生における宗教性を重視するのである。このように、新渡戸は修養言説のなかで宗教的視点をもち、それを積極的に展開していった。

では、新渡戸は宗教をどのように理解したのであろうか。言説のなかでは、つぎのような記述が見出される。

僕は『宗教には理屈は要らぬ。自力でも他力でもかまはぬ。只自分以上のものに頭を下げて、自然に心を清ふする。それが即ち宗教の根源である。君の母人の如きは立派な信者である。』と云ふたことがある。

「大国民としての日本人の修養」
（『実業之日本』15巻2号（1912年1月15日））

彼は、宗教を「自然に心を清ふする」として

解する。この「心を清ふする」とは「自分以上のものに頭を下げ」ること、つまり、超越なるものと邂逅し、内省する時に得られる。そのときに、超越なるものの内在が自覚され、「心」が「清」くなるというのである。

新渡戸は、この体験を人間の生のなかで重視した。彼は『実業之日本』12巻11号（1909年5月15日）のなかで、「毎日五分間にても黙思の習慣を有せざる人生は枯死すべし」というタイトルの論考を掲載している。そこでは、「汝の祈る時は一室に籠つて戸を鎖せ」というイザヤ書26章20節のことばが引用され、日常生活での「黙思」を勧めている。「黙思」は「天地の霊と交はる」機会とされ、自己と「霊」との関係性、すなわち「人間以上のもの」との関係性において内省する時間といわれている。このように、ここでの記述では、先に述べた「ヴァーチカル」の関係性の自覚が、とりわけクエーカーの視点から綴られているのである。

「黙思」の重視は、クエーカーの特徴のひとつである。クエーカーは沈黙のうちに主に直接触れる体験を重んじた。つぎの一節は、新渡戸が国際連盟事務次長の任を終え、ジュネーブから帰国する際に、ジュネーブ大学で行った講演の一部である。そこで、新渡戸はクエーカーの礼拝についてつぎのように述べている。

クエーカー主義者たちの間で広く行われている特有の礼拝形式である—すなわち、靈感を待つ静黙である。彼らは、神がすべてのものに内在すると信じているから、皆で集まって神の顕現にふさわしい環境づくりをするのである。誰かが、—それは、男性、女性あるいは子供の別を問わない—その心が動くのを感じると、その人は説教や歌や祈りの形で証しを行うのである。

（『日本人のクエーカー観』1926年12月14日）

（『全集』19巻422頁）

さて、クエーカーとして、超越なるものが「内在」する「心」を重んじた新渡戸は、超越なるものとの関係性の自覚を「潜勢力」の発見へとつなげていく。

『実業之日本』の修養言説のなかでは、「吾人も少しく心静かに己れを省みると、銘々の内に潜んである力の偉大なる事を感じる」といい、新渡戸はそれを「吾人の内の潜勢力」（「忙中一閑の修養法」『実業之日本』15巻22号（1912年10月15日））の発見であるとする。これが、先ほどの「清」められた「心」と考えられる。

（2）行動の起点としての動機の重視

この清められた「心」は超越なるものを根底に据えることにより不動の「力」となり、人間の精神的支柱とされた。それは、新渡戸のいう「潔白なる動機」（「大国民としての青年の覚悟」『実業之日本』15巻12号（1912年6月1日））の意と考えられる。人間の行動の起点となる「動機」のあり様については、新渡戸が常に問うところであった。新渡戸は、超越なるものに裏付けられる絶対的な「潔白なる動機」、（同様のことばとして「正しい動機」、「動機の醇正」（以上「英雄崇拜論」『実業之日本』14巻1号（1911年1月1日））を強く要請した。この「潜勢力」といわれる動機の発見こそ、新渡戸における修養の眼目のひとつであったと考えられる。

要するに修養の方法は種々あるであらうが、僕の最も望む要点は形式に流れぬ様、余り外部の規律にのみ流れぬ様、規律を破らないで、之を内部に利用することに、もつと気をつけたいのである。外部の規律のみでなく、内部に及ぼし、心の底に潜める力を引き出したいのである。

（『鼻で息して開けた口を閉せ』

（『実業之日本』15巻11号（1912年5月15日））

「心の底に潜める力」である「正しい動機」は

人間の行動の正当性を保証するとともに、人間と人間との間の精神的紐帯を築く徳目の根底にある「力」であり、別言すれば、「善」であったのである。新渡戸は「正しい動機」を近代日本のあるべき実業の支柱に求めたのである。

おわりに

今回、新渡戸が実業之日本社の編集顧問時代に『実業之日本』に寄せた修養言説を量的・質的に分析を行った結果、確認されたことは、修養言説で彼のキリスト教信仰が大きく反映していた点である。なかでも、「心」の重視、「心」を通じた人間関係の構築に関する言説が多くみられたことは、新渡戸の修養言説を特徴づけるものであった。そこには超越なるもの、すなわち、神との邂逅する場として「心」を重視するクエーカーとしての視点が鮮やかに浮き彫りにされていたのである。

新渡戸の修養言説は、人間の生に宗教的意味を附与することにより、近代日本における青年たちを当時影響力の強かった立身出世という世俗的価値観から解放する働きを有するものであったといえるだろう。「心」の交流という人間の本来の生を取り戻そうとする新渡戸の試みは、近代日本の競争社会に反省を迫るものであったと考えられる。この点に、新渡戸の修養言説の思想的意義が認められるだろう。

これまでみてきたように、新渡戸の修養言説はキリスト教の色彩の強い言説であった。それにもかかわらず、実業界に身を置く非エリート層を中心に広く受け入れられた要因として、キリスト教のなかでもクエーカーのもつ独自性を挙げることができる。神秘主義的傾向の強いクエーカーだったからこそ、難解な聖書の解釈を説くのではなく、その神秘性を介して、多くの人の心性に強く訴えることができたのであろう。

最後に、残された課題を述べておきたい。本稿では、『実業之日本』の修養言説のなかでも新

渡戸の言説を取り上げ、考察した。『実業之日本』における修養言説の時代的意義をあきらかにするためには、新渡戸以外の修養言説にも考察の対象を広げる必要があるだろう。この点については別稿を期したい。

付記

- ・本稿は、平成26年度科学研究費助成事業（奨励研究）課題番号26901006「新渡戸稲造の編集顧問時代における雑誌『実業之日本』の修養言説に関する思想史的研究」による研究成果の一部である。
- ・本稿は、日本道德教育学会第84回秋季大会（2014年11月30日 於高知大学）で行った研究発表に加筆、修正したものである。会場において諸先生方から貴重なご指摘を賜った。この場を借りて心より御礼申し上げる。

註

『実業之日本』からの引用は、国立国会図書館デジタルコレクションによる。尚、旧字体は、適宜改めた。新渡戸稲造の著作からの引用は、『新渡戸稲造全集』（教文館 1969-2001）による。本文中では、『全集』と略し、巻号と頁数を記した。

注

- (1) 『実業之日本』に掲載された新渡戸の修養言説を取捨選択して集録した『修養』（1911）は、当時のベストセラー（1914年2月には縮刷版として29版、1924年3月には100版、1929年5月には137版を数えている。（『全集』7巻「解題」691頁））となったように、多くの読者を獲得している。
- (2) 馬静氏の『実業之日本社の研究—近代日本雑誌史への序章』は、『実業之日本』および実業之日本社に関する包括的な研究として唯一のものであろう。馬氏は実業之日本社の拡充期に新渡戸の編集顧問時代を位置付ける。そして、新渡戸の修養言説の特徴を彼の言説に「キリスト教的な事跡を利用」した点に見出し、彼の修養言説をキリスト者としての「伝道」と指摘する。戸村理氏は、「大正・昭和初期における大学・学生観—雑誌『実業之日本』における言説分析を中心に—」のなかで、教育学の視点から、『実業之日本』の執筆者と記事タイトル、記事の内容

- を網羅的に分析するなかで、新渡戸に触れている。
- (3) 杉原四郎『日本経済雑誌の源流』有斐閣 1990 4頁
- (4) 竹内洋『日本人の出世観』学文社 1981 112頁
- (5) 岡野他家夫『日本出版文化史』原書房 1981 132頁
- (6) 増田義一の社会教育については、拙稿「増田義一の修養言説」『新渡戸稲造の世界』第23号（一般財団法人新渡戸基金 2014）を参照されたい。
- (7) 「新渡戸博士の思い出」（『新渡戸稲造全集』別巻1 174-182頁）によると、新渡戸が編集顧問となる前年の1908年、増田は書面にて新渡戸に編集顧問の就任を懇請した。続けて、増田は新渡戸邸に赴き、社の方針、主義などを説明し、その後再度、書面にて懇請している。このような様子からは、増田の新渡戸への熱い思いが伝わってくる。
- (8) 筒井清忠『日本型「教養」の運命—歴史社会学的考察』岩波現代文庫 2009 16頁
- (9) E. H. キンモンス著 広田照幸ほか訳『立身出世の社会史—サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部 1995 154頁
- (10) 森戸辰男は「教育者としての新渡戸先生」のなかで、一高で新渡戸が行った倫理の授業では、ロングフェローや孟子、科外授業で、セイヤーの『リンコルン伝』やカーライルの『衣装哲学』、ゲーテの『ファウスト』、ミルトンの『失樂園』が取り上げられたと回想している。（『全集』別巻1 298頁）このような状況を河合榮治郎は、「広い西欧の教養」と呼ぶ。（「新渡戸先生の思出」『全集』別巻1、325頁）
- (11) 「自叙伝の試み」『和辻哲郎全集』第18巻 岩波書店 1978 452頁
- (12) 最近の研究としては、小林竜一「第一高等学校長としての新渡戸稲造—「籠城主義」との対決」『社会学論集』vol.17（2011）がある。
- 誌『実業之日本』における言説分析を中心に—『東京大学大学院教育学研究科紀要』第49巻 2009
馬静『実業之日本社の研究—近代日本雑誌史への序章』（平原社 2006）
山崎安雄『著者と出版社 第二』（学風書院 1955）

主な参考文献

- E. H. キンモンス著 広田照幸ほか訳『立身出世の社会史—サムライからサラリーマンへ』（玉川大学出版部 1995）
- 実業之日本社社史編纂委員会編『実業之日本社百年史』（実業之日本社 1997）
- 杉原四郎『日本経済雑誌の源流』（有斐閣 1990）
- 竹内洋『立身出世主義（増補版）近代日本のロマンと欲望』（世界思想社 2005）
- 戸村理「大正・昭和初期における大学・学生観—雑